

宮崎発夢未来～美しい郷土を子どもたちに

みやざき中央新聞

The Miyazaki Central Journal

2月24日(月)

2014年(平成26年)

2543号

2
面
記
事

是松 いづみ…あずさからのメッセージ～No. 5(終)
 荒木 恭司…建設業からサービス業へ～No. 2
 久志 尚太郎…変わり続けるものが生き残る～No. 2
 加藤 種男…地域を変えるアートの力～No. 2
 水谷 もりひと…取材ノート「違うのは位置ではなくパッション」

宮崎県人権同和対策課が主催する「県民人権講座」、2回目の講師は映像作家の今村彩子さんだった。

今村さんは生まれつき耳が聞こえない。子どもの頃、テレビには字幕がなかったため、家族と一緒にテレビを楽しむことができなかった。寂しそうにしていた今村さんを見て、お父さんが字幕付き洋画のビデオを借りてきてくれた。その映画を見て感動した今村さん、「大人になったら多くの人に元氣や勇氣を与えるような映画を作りたい」と思うようになった。今回の講座では、今村さんが制作したドキュメンタリー映画『音のない3・11』被災地にろう者もいた』についての話だった。

あの震災のとき、耳が聞こえないため、津波警報に気が付かず、亡くなった方が多数いたという。「命に関わる情報に格差があつてはならない。その格差をなくしたい」と今村さん。

バリアフリーが語られて久しい。そのおかげで、目に見えるバリアはだいぶ減ってきているように思う。

しかし、見えないバリア、「聞こえない人がいる」という紛れもない事実、普段健康な人が何気なく日常を過ごしている限り、忘れてしまいがちだ。

その結果、まだまだ見えないバリアは至るところに残っているように思う。少しずつ変えていければ、と思う。

そのためにも、知ることが大切だ。今村さんの『五目ごはん』という映画で

は、聞こえない女性と聞こえる男性が結婚し、1歳の息子を育てている様子を取り上げた。妻の真理さんが働き、夫の源さんが育児を取って1年間、主夫として家事と育児を担当した。

朝は6時に起床。源さんが真理さんの朝ごはんとお弁当、さらに息子・共蔵くんともぞうの朝ごはんを作る。その間、真理さんは体操をしたり、準備をする。

朝ごはんを食べ終えた真理さんは、共



編集部次長 西畑 良俊

知ることから始めよう

共蔵くんを膝に乗せて、手話で絵本を読む。共蔵くんは、まだ手話は分からないが、真理さんの手話と絵本を交互に見る。お弁当を作り終えた源さんは、「お弁当、忘れないように」と真理さんに手話で言い、洗濯機を回す。

出勤の時間になると、ゴミ袋を抱えた真理さんを、源さんは洗濯物を干しながら見送る。

源さんが育児を取って共蔵くんを育てると夫婦で決めた時、源さんの両親や職場の上司はかなり驚いた。

上司からは、「育児を取るのあなたの権利だからいい。でも、今までで初めての

ことだ」と皮肉交じりに言われた。1年間の育児が終わる頃、源さんはこう話してくれた。

「妻は障害者で自分は健常者。妻が働いて僕が主夫と聞くと、世間は珍しいと思う。でも、こういう夫婦がいてもいいと思う。いろんな人がいて、いろんな生き方が認められる社会になれば、誰もがもつと生きやすい社会になると思う」と。

今村さんのホームページにあるエッセイには、こんなことが書かれていた。ある日、今村さんは障害を疑似体験するワークショップに、アドバイザーとして参加した。

体験終了後、参加者は口を揃えて、「いい経験になった」「これからは、周りに聞こえない人がいたら助けたいと言った。

そう言いながら、今村さんを見る目は、「聞こえないって大変だなあ」というものだった。その視線が嫌だった。

「聞こえない」大変、かわいそう「聞こえない人」助ける対象」という公式ができてしまっている。「聞こえないことは大変なこともあるけれど、楽しいこともあるんだよ。豊かな世界だよ」と今村さんは言いたかった。

人は自分の知らない世界を怖がったり、偏見を持ってしまいがちだ。そんなとき、このエッセイのタイトルがヒントになる。「友達からはじめよう」

「愛の反対は無関心」とマザー・テレサは言った。いろんな生き方があることを、まずは知ることから始めよう。